

## 【プロジェクト報告】

# 山梨学院大学教材開発プロジェクトの報告

## ー「日本語文法」教科書の開発を中心にー

徳田 恵・原田 三千代・金 桂英・古屋 憲章・村上 智子

山梨学院大学グローバルラーニングセンターでは、日本語力が十分でなく、授業受講に支障のある学部留学生向けにオリジナル教材を開発するプロジェクトが 2022 年度に始動した。本稿は、本プロジェクトの背景と目的、および一つ目の成果物である「日本語文法」教科書の開発に関して報告するものである。

**キーワード:** 技能系 3 科目, 市販教材との差別化, 誤用, 対照的な文法項目, 産出

### 1. プロジェクトの背景と目的

山梨学院大学グローバルラーニングセンター（以下、GLC）では、2020 年度より新日本語カリキュラムが開始され、留学生の日本語習熟度に応じた科目を展開している。学生は日本語習熟度により A「学部の授業受講に支障のないレベル」、B「学部の授業受講にやや支障のあるレベル」、C「学部の授業受講に支障のあるレベル」に分けられ、レベルに応じて履修する科目が決められている。縦横のアーティキュレーションを念頭に、全レベルの必修科目として「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」が開講され、B レベルと C レベルには日本語能力補強のために「日本語特講Ⅰ」「日本語特講Ⅱ」も開講されている。さらに、C レベルは基礎的な日本語能力補強を目的とする「日本語文法」「日本語コミュニケーション」「日本語語彙」（以下、これら 3 科目をまとめて技能系 3 科目という）が正課科目として設置されている。

C レベルの留学生が履修する技能系 3 科目では、これまで既存の市販教科書を使用してきた。しかし、十分な学習効果を上げてきたとはいえない。市販教科書による授業が C レベルの留学生に適合しなかった原因として、大きく次の二点が考えられる。一つ目は、市販教科書を用いた授業は「できないままの繰り返し」に陥りやすいということである。市販の教科書は汎用性を志向するものであり、該当するレベルの教授項目が網羅的に扱われる。汎用性が高いがゆえに、学習者にとっては自分という文脈とは切り離された学習が繰り返されるため、断片的な知識にしかない。つまり、市販の教材をいくら繰り返し学習しても既習項目と自分が置かれている文脈を結びつける段階が抜けているため、「できないままの繰り返し」に陥ってしまうのである。二つ目は、市販教科書の使用が留学生の学習への動機づけを妨げるということである。市販教科書を用いた授業は、たとえ留学生がそれまでに使用したことのない教材であったとしても、入学前の教育機関（例えば、日本語学校）における学習に似通って見えるため、同じことの繰り返しの感じてしまう。その結果、留学生の日本語学習に対する動機づけが減ることとなる。

本プロジェクトはこうした背景をふまえ、日本語力に課題を抱える留学生の日本語力補強を目的に GLC 事業の 1 つとして 2022 年度に開始された。開発教材では、学習項目を網羅的に扱うの

## 山梨学院大学教材開発プロジェクトの報告 ―「日本語文法」教科書の開発を中心に―

ではなく、必要性が特に高いと思われるものに絞り、さらに既習であっても繰り返しに感じないよう提示の仕方に工夫をした。また、実際の運用に結び付くよう必ず産出課題を設け、市販教科書との差別化を図ることとした。開発は、半期ごとに「日本語文法」、「日本語コミュニケーション」、「日本語語彙」の順番で行い、授業での試用を経て改訂を重ねていく予定である（図1）。

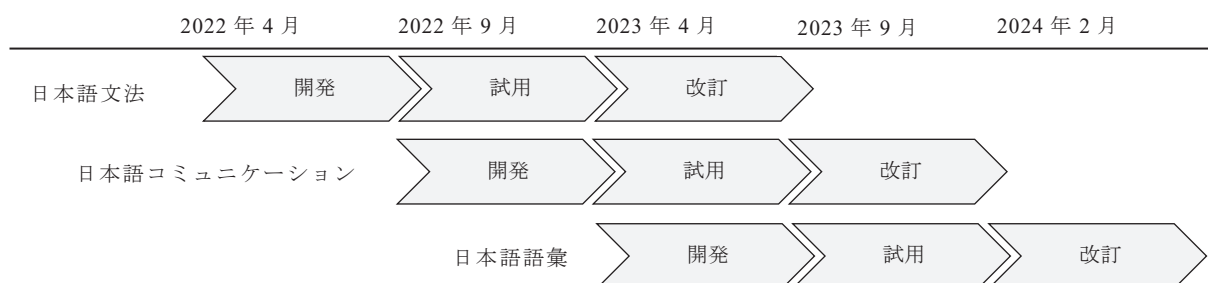


図1 教材開発プロジェクトの流れ

次章では、最初の取り組みである「日本語文法」の教科書の開発について報告する。

## 2. プロジェクトの進捗状況：「日本語文法」教材開発

本プロジェクトのメンバーは、GLCの技能系3科目担当者4名と外部協力者1名である。メンバー間で協議を重ね、教科書の作成にあたっている。作成した教科書を2022年度後期より順次、試用版として授業で用いている。以下、「日本語文法」の教科書の開発過程を報告する。

### 2.1. 文法項目のリストアップと整理

取り扱う文法項目は山梨学院大学グローバルラーニングセンター「YGU全学横断型Can-doプロジェクト」ワーキンググループ（2022）による『技能系Can-doリスト2021』<sup>1)</sup>をもととし、プロジェクトメンバー間で検討し、再構成した。例えば、このCan-doリストには動詞や形容詞の活用形が挙げられているが、これらは独立した課として取り上げるのではなく、他の文法項目と共に扱い、活用のルールではなく、当該文法項目の意味・機能に焦点を当てた。また、対象留学生が既習の学習項目の繰り返しのようになって学習意欲が減退しないよう、提示の仕方にも工夫した。具体的には、これまで日本語科目を履修していた留学生が授業課題において産出した誤用をもとに、混同しやすい文法項目を絞り込み、それらの項目を対照的に比較しながら提示することで、それぞれの項目を特徴づけ、意味や機能の理解を促進することを目指した。例えば、使役表現や受身表現は単独で扱うのではなく、留学生が混同しやすい授受表現とともに提示した。

### 2.2. 各課の特徴

『技能系Can-doリスト2021』では「日本語文法」については、「1 授業項目の文法的概念が理解できる」「2 文法的理解を使用に関連付けることができる」「3 自身の日本語使用における文法的正誤に注意を払うことができる」「4 自身の日本語使用における文法的正誤を判断し、誤った場合に修正することができる」「5 周囲のリソースを効果的に活用することができる」が挙げられている。各課の導入から練習にこれら1～5を反映させるよう、教科書を作成した。

各課の導入部では、「1 授業項目の文法的概念が理解できる」ために、まず本学留学生の実際の誤用をもとにした対話で学習項目を提示し、問題意識を喚起させることを目指した。図2は、本

来「聞いてもらった」と授受表現で表すところを「聞かれた」と受身表現にしてしまい、うまく意思疎通ができていない例である。

〔1〕導入

★宋さんと張さんがスピーチについて話しています。

宋： 張さん、明日のスピーチ、うまくいきそう？

張： うん。さっき、ピア・サポートで、先輩に聞かれた。だいじょうぶだって。

宋： 聞かれた？先輩にスピーチについて質問されたっていうこと？




図2 導入の対話例：L12 受身／授受表現より

次に、文法概念を理解し実際の文脈でどのように使うのかイメージしやすくなるように短い対話形式の練習を配置した。次の例は一つの対話で自動詞と他動詞を区別して使う練習である。

例) 使い方の練習例：L10 自動詞／他動詞より

張：部活のミーティング、何時からだった？

宋：4時からだよ。もうすぐ（始 ）から、急ごう。

部長：時間になりましたので、今からミーティングを（始 ）たいと思います。

さらに、「3 自身の日本語使用における文法的正誤に注意を払うことができる」「4 自身の日本語使用における文法的正誤を判断し、誤った場合に修正することができる」ことを目指し、間違いを探す練習を配置した。これらは導入と同様、実際の留学生の誤用をもとに作成した。下記は、受身表現と授受表現にて間違いを特定し、どう修正するのかを考えさせる練習例である。

例) 間違い探しの練習例：L12 受身／授受表現より

次の文の間違いを、\_\_\_\_\_に注意して直しましょう。

①熱が出て病院に行ったが、待つ人が多くて1時間以上待って、やっと名前を呼んだ。

②花粉アレルギーがひどかったので、青木病院の先生に診察されました。

各課の最後のタスクとして「2 文法的理解を使用に関連付けることができる」ことを目指し、当該文法項目を用いて産出する活動を配置した。「5 周囲のリソースを効果的に活用することができる」については、対象留学生が自律的に活用することは現段階では困難であると判断し、まずは身近なインターネット上の資料を提示し、実際の情報が学習リソースとして日本語学習に役立つことを示すこととした（図3）。

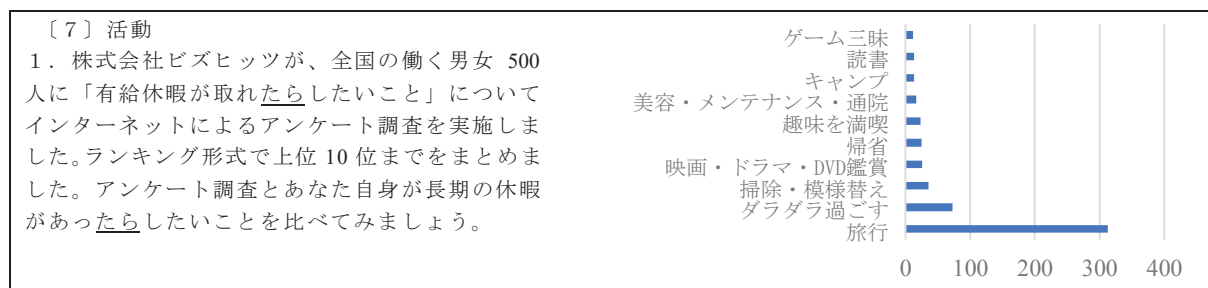


図3 インターネット上の資料を活動とした例：L9「たら」／「ても」より

また、留学生が授業の前後でその日の授業で扱う文法項目に関して自分自身の学習状況を判断し、改善の目安にできるように自己評価表を掲載した（表1）。日本語文法の Can-do リストの1～4が確認できるよう、どの課も目標の1に「理解できる」、2に「間違いに気づく」、3に「産出できる」を設定した。

表 1 各課の目標例：L1 文体の統一

	どのくらいできるかな？	授業前	授業後
1	文体の違いが理解できる	○・△・×	○・△・×
2	文章の中で文体が統一されていないことに気づく	○・△・×	○・△・×
3	文体を統一した文章を産出できる	○・△・×	○・△・×

### 2.3. 本教科書を用いた実践

2022 年度後期より「日本語文法」の 3 クラスにおいて本教科書を用いて実践を行った。1 週間に 1 回 1 コマ 90 分、15 回の授業で、1 クラスの人数は約 15 人であった。初級の復習となる活用形の練習などは事前課題とし、授業内では当該文法項目の意味・機能の理解、誤用に気づくこと、運用能力の養成に重点を置いた。導入では、提示されている対話に誤用が含まれ、意思疎通に支障があることを認識させた。練習の対話はペアワークを中心に行い、運用につながるよう発話させた。活動では、作成した文を教員とともに修正し、その修正過程もクラスメイトと共有することで、文法的な正誤に意識を向けるよう促した。

### 3. 所感と今後の展望

本プロジェクトによる教科書を用いた実践では、授業後の自己評価が上がる留学生が多く見られた。また、学期末の授業評価において「文法能力が上がった」という回答もあり、留学生自身が成長を実感できたようであった。このことから、「できないことの繰り返し」や「同じことの繰り返しによる学習意欲の減退」という状態は回避できたのではないかと推察される。

現在、「日本語コミュニケーション」の教科書の開発が進行中である。「日本語文法」同様、運用能力を高めることを目指し、教室内にとどまらないタスクを考案、設定する予定である。

今後は、現場で教育実践をしていくなかで、技能系 3 科目間のアーティキュレーション、「日本語 I・II」、「日本語特講 I・II」とのアーティキュレーションも視野に入れつつ、教材の改良に努め、本学の留学生に対する学習効果を高めることを目指していく。

#### 注

- 1) 詳細は、山梨学院大学グローバルラーニングセンター「YGU 全学横断型 Can-do プロジェクト」ワーキンググループ (2022) の p.23 を参照のこと。

#### 参考文献

- 株式会社ビズヒッツ (2021). 【有給休暇が取れたらしたいことランキング】男女 500 人アンケート調査 <https://bizhits.co.jp/media/archives/19427> (2023 年 2 月 5 日)
- 山梨学院大学グローバルラーニングセンター「YGU 全学横断型 Can-do プロジェクト」ワーキンググループ (2022). 国際共修のための語学教育：アカデミックな場面への参加を可能にする日本語授業の Can-do リスト 2021 [https://www.ygu.ac.jp/glc/wp\\_glc/wp-content/uploads/2022/04/28120fd123d4e578f76975ff65a9b56a.pdf](https://www.ygu.ac.jp/glc/wp_glc/wp-content/uploads/2022/04/28120fd123d4e578f76975ff65a9b56a.pdf) (2023 年 2 月 2 日)

TOKUDA Megumi・HARATA Michiyo・JIN Guiying・FURUYA Noriaki・MURAKAMI Tomoko